

六 花

り
つ
か

月刊俳句雑誌

2007 15th anniversary

Rikka haikukai rockoh yamada

cover designed by masumi

8月号

点^{とも}るたび螢は光増しにけり
荒^あ瀧^{たき}やぬめる木の根をつかみ登る
厨^{かわ}紙^や水にしみこむ蟬の朝
螢籠ゆさぶり子等は眠らずよ
天心に雲のよぢれる夕^ゆ立^{だち}あと
夕焼や鋏^{くわ}打ち当つる石の音
睡蓮の覆^おひきれざる濁りかな
蓮の葉の影蓮の葉を揺らしけり
睡蓮にわが坐^ざす影の及びたる
落^{おち}人^うの如し瀧^{たき}巖^{いわ}登れるは
やまももの蟻吹き飛ばし含みけり

夏蝶の卵葉裏を明るうす
下闇を突きぬけ落つる爆布かな
五月雨の鳥居にとまる川鶉かな
雲の峰積み上げてゆく日暮かな
雲の峰遠きものほど大きかり
虫干の靴の歪みて乾きをり
臍に魚はね当たりたる夜振かな

辻享子さんを偲び

八月や二日の風の涼やかに

木曾岳風子さんを偲び

百日紅に八月二十八日来る

ことり

これほどの声が骸になるか蝉よ
蝉の風私に分かれては合へり
蝉声の激しきほどに森冷ゆる
知らぬ間に日傘下げをり蝉の森
この森は蝉の胎内たいないなりにけり
蝉声は重たきものと知りにけり
ひとときを軋きませ鳴ける夜蝉かな
声満ちて引いては満ちて蝉の森

蝉声に森膨ふくらんでゆきにけり

蝉声の中や空うつせみ蝉みづみづし

蝉声の流るる中にをりにけり

蝉声を掬すくはむとする掌てに湿り

土も樹も蝉に病みたる森なりぬ

転がれる蝉の脚あしのみ動きをり

木曾岳風子さまを偲び

百さるすべり日紅残暑の海へ散りにけり

たんぽぽの緊張を吹き崩したり 田尻勝子

茅花野を風のまどひて吹きゆけり

バイバイと種を埋めし枇杷の成る

橡餅は山の色してをりにけり

立浪草広重の富士見えまいか

たんぽぽの絮（わた）の球は一粒一粒ごとが繋がりがあって緊張のうえに成り立っていたのだ。それを吹き崩すことによつて緊張が解かれ、風に乗れやすくなつて飛んでゆく。その絮に息を吹きかけたか、風が吹き崩したのかは重要な問題ではなく、自然に存在する形がさまざまな力や作用によつていふところ、琵琶の句も独自性が光る。

南部牛 みなべぎゅう

貝森光洋

耕して長寿の相の南部牛
幸せの数ほど風船膨ふくらます
風船の中に風船らしき顔
佳よき風船膨らみ続けて自爆する
春眠しゅんみんの子は大空を飛んでおり

コースター

梶浦玲良子

定位置に雲雀ひばりとどまるコースター
感性の異なる一人静しずかな
闇に浮く御用提灯さんじゃくね三尺寝
食パンの耳きり落す帰雁きがんかな
きさらぎの山ころげたる小町針

苔の花

木内美保子

ぜんまいの獣色して生毛脱ぐ
かたまりて蛸蚪の流るる野川かな
句碑の字の中に咲きたる苔の花
卯月波船とまりに散らし島渡船
大皿に並んでをりぬ枇杷の種

蟻の目

笹村政子

蟻の目の濡れてをりたる真昼かな
くちなはの水脈を崩さず進みけり
夏落葉水の面の歪み初む
緑風りよくふうや消えては現るる權の泡
梅雨つ入りかな水際に群るる鯉の口

雪樹集

五月晴 池崎るり子

四万十の流れゆるやか鯉幟
マンションに二本の増へし鯉幟
武者人形十九歳となりにけり
五月晴 六花創刊十五年
リクルートスーツ眩しき新樹光

菜の花 松本文一郎

菜の花の太く括られ朝の市
自転車の菜の花明り伝ひゆく
春宵の赤子の声や去り難し
朝堀りの筥飯を仏飯に
薬より温泉が効きにけり四月馬鹿

春昼 K O K I A

紙風船ぐしやりとつぶす赤子の掌
ぼうたんの蕾ふくらみみて咲かず
春昼の風のやうなる魚の影
嬰の掌に五つの笑窪鯉幟
鯉幟鱗 一片づつ光る

六花集

六甲選

田尻勝子

バイバイと種を埋めし枇杷の成る

橡餅は山の色してをりにけり

立浪草広重の富士見えまいか

たんぽぽの緊張を吹き崩したり

茅花野を風のまどひて吹きゆけり

永田 勇

鯉幟大口開けて吊られけり

鯉幟気ままな風に泳がさる

鯉幟尾ひれ仲良く振りにけり

揺れもせずぶら下がりをり鯉幟

ベランダに垂れ下がりあり鯉幟